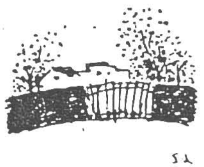
熊日1971.03.26

読書



カット・境野一之

凄烈な水俣病の実態

石牟礼道子著「苦海浄土」

湯上国敏

湯上国敏さん

水俣病が「マスコミ」の俎（そ）上に上ってから、すでに久しい。

そのあいだ、私のように、いなかの農村に住み、刺激の少ない繁忙な農作業に追われているものにも、毎日の新聞を通じて、それなりに、表面的な事態の動きは承知していた。

しかし私のように無神経で、怠惰なものには、それが日常的な、単なるドキュメンタリーとしてしか接することが出来なかった。

「苦海浄土」が上梓（し）され、それが新聞紙上に紹介され、そして、大宅壮一賞受賞の報道を見ても、ついにかえりみることをしなかった。そのことは私の弱点のひとつを曝（さら）し、同時に、視野の狭さと偏狭さを暴露する以外なにものでもないのであるが、それでもあえて、苦海浄土を読むことをしなかった。

それはやはり、苦海浄土を、単なる記録文学と見、きわものとして取り上げた私の軽薄さによるものであった。

苦海浄土は、ある意味では、近代公害研究の、第一義的な作品と言っても過言ではないであろう。

私は全編、肥後独特の方言をもって描写され、そしてかくまで惨烈な迫真の作品を、不明にして、いまだかつて読んだことがない。患者の実態を無残なまで冷静にとらえて、見据えている作者の、神経の図太さには今さらながら驚嘆のほかはない。文字通り鬼哭啾々（きこくしゅうしゅう）惻惻（そくそく）として迫る患者の吐息と、呻（うめ）きは、凄（せい）惨の一語に尽きると言ってよい。

所々に挿入する無味乾燥な医学論文が、意外なほど精彩を放ち、そして普通ならば到底読むにたえないような市議会の質疑応答が、作品の上に実に見事に浮き彫りされているのは一体なぜだろう。私は作品の底を流れる仏教思想を見のがすことは出来ない。そしてそこにはまた意外なほど奇妙な詩の流れを見いだすことができる。

私は六十二歳の還暦を迎えてから源氏物語を読み出した。それもちょっとしたきっかけからであった。そして丸五カ年を費やした今日、最終冊の浮舟を読み終えようとしている。私は源氏物語を読み進むにつれて、作者の執拗（よう）さと克明と粘着力に瞠（どう）目した。時代に大きな距離を持つ、この代表的な古典を、ここに持ち出すのは少しこっけいに過ぎるが「にごりえ」や「たけくらべ」の樋口一葉も「長流」の作者も、住井すゑも、ある意味では、高群逸枝も、何かしら心の奥底には、外にはどうしても持ち得ない、ある何物かをひそませているように思えてならない。苦海浄土も、この意味では、例外ではないような気がしてならない、乳房の乳のように、吸えば必ず出て来るヒューマニズムの流れが、絶えず作者の胸底にたたえられており、そのことがあくことのない企業の重圧と、世の白眼とをはね返して、苦海浄土のようなすぐれた記録文学を、世に問うことができたのであろう。

私は名もない山村に住んでいる。経済成長という美名に翻弄（ろう）せられて、今日の農村が農業を見失い、農業はおろか、祖国や、人間までも遠い過去に押しやろうと狂奔している姿は、その実態においては、水俣病の患者と一脈のかすかな糸くずによって、つないでいるように思えてならない。

私は杉山の下切りの合い間を縫って、苦海浄土を読んだ。そくそくとして迫る凄烈な、水俣病の実態を今日ほど強く心に刻んだことはない。そして同時に、苦海浄土の深淵には冷酷と残忍と、そしてヒューマニズムとが同居しているのではないかという錯覚に襲われる。

作者はいま群馬の安中から、巨大な冥（めい）府をおのれ自ら造りつつある首都東京を見おろしている。腐りかけた骨の髄までしゃぶり取ろうとして。（下益城郡小川町北海東・農業＝65歳）